

## 親の育児信念と養育行動の実行が育児ストレスに及ぼす影響

宇田川 詩帆 (Shiho Udagawa) 指導：嶋田 洋徳

**【問題と目的】**育児を行う親の育児ストレスは虐待行為をはじめとした不適切な養育行動を生起させることが示されており（中谷・中谷，2006），親の育児ストレスに影響を及ぼす要因の解明は重要な課題である。そこで本研究では，育児を行う親の不適切な養育行動の生起要因である，育児ストレスに影響を及ぼす要因を検討することを目的とする。研究1では，親に対する質問紙調査を実施し，育児信念（認知的要因）および養育行動（行動的要因）が育児ストレスに及ぼす影響を検討する。また研究2では，育児を行う親に対して，認知行動療法の技法の1つであるセルフモニタリング法の実施を求めることによって，親自身に養育行動に関する随伴性を確認することを求める。育児信念および子どもの反応のモニタリングの程度がストレス反応に及ぼす影響を検討する。

**【研究1：方法】調査対象者** 3歳～6歳の幼児を育てる親 255名（平均年齢 $34.25 \pm 4.23$ 歳：全て女性）。

**測度** (a) 養育スキルの傾向：養育スキル尺度（三鈷，2008），(b) 育児信念の固さの程度：育児信念尺度（清水，2003），(c) 育児に対するストレス反応：育児ストレス反応尺度（池田，2011），(d) フェイス項目：親の年齢，子どもの性別，年齢，兄弟の有無を使用した。手続き 関東近郊の私立幼稚園に通う幼児の親に (a) ～ (d) の質問紙への回答を求めた。

**【研究1：結果】** ポジティブ養育スキル（高群，低群）×育児信念の固さの程度（高群，低群）を独立変数，育児ストレス反応得点を従属変数とする2要因分散分析を行なった結果，「母親は子どもに対し愛情をいつも抱いているものだ」という項目について，養育スキルの主効果 ( $F = 11.14, p < .01$ )，育児信念の主効果 ( $F = 14.59, p < .01$ ) および交互作用 ( $F = 6.30, p < .05$ ) がみられた。また，ネガティブ養育スキル（高群，低群）×育児信念の固さの程度（高群×低群）を独立変数，育児ストレス反応得点を従属変数とする2要因分散分析を行なった結果，「育児は自分にとって価値がある」という項目を含む3項目で養育スキルの主効果 ( $F = 30.30, p < .01$ )，育児信念の主効果 ( $F = 14.53, p < .01$ ) および交互作用 ( $F = 12.08, p < .01$ ) がみられた。

**【研究2：方法】研究参加者** 研究参加者 3歳～6歳の幼

児を育てる親17名（平均年齢 $37.56 \pm 3.37$ 歳：全て女性）。なお研究1において質問紙への回答を求めた調査協力者を含む。

**測度** (a) 養育スキルの傾向：養育スキル尺度（三鈷，2008），(b) 育児信念の程度：本研究にて作成，(c) 育児に対するストレス反応：育児ストレス反応尺度（池田，2011），(d) モニタリングの程度：本研究にて作成，(e) フェイス項目：親の年齢，子どもの性別，年齢，兄弟の有無を使用した。

**手続き** 信念モニタリング期として，1週間子どもに働きかける際の育児信念の程度の記録を求めた。その後，子どもの反応モニタリング期として，1週間子どもに働きかけた後の子どもの反応を見ていた程度の記録を求めた。

**【研究2：結果】** ほめる場面における育児信念の程度，ほめる場面におけるモニタリングの程度，ポジティブな養育スキルの傾向を独立変数，モニタリングの前後におけるストレス反応の変化量を従属変数とする重回帰分析を行なった結果，いずれの変数からもストレス反応に対する有意なパスは認められなかった ( $\beta = -.17, n.s.$ ； $\beta = -.02, n.s.$ ； $\beta = -.38, n.s.$ )。また，しかる場面における育児信念の程度，しかる場面におけるモニタリングの程度，ネガティブな養育スキルの傾向を独立変数，モニタリングの前後におけるストレス反応の変化量を従属変数とする重回帰分析を行なった結果，いずれの変数からもストレス反応に対する有意なパスは認められなかった ( $\beta = -.05, n.s.$ ； $\beta = -.03, n.s.$ ； $\beta = -.05, n.s.$ )。

**【総合的考察】** 研究1では，育児がルール支配行動になっていない，もしくは，親自身が子どもから強化子を得られるような養育スキルを持っていない状態像においてストレスが高いことが示された。また研究2では，育児信念および子どもの反応のモニタリングの程度は，ストレス反応に影響を及ぼさないことが示された。したがって，適応的な育児の信念を支援者と一緒に考えながら，親が日々の育児の中で子どもの反応をモニタリングしていくことで，ストレス低下に繋がることが考えられる。また，親に子どもの反応をモニタリングしてもらう際には，親の強化子となるような子どもの表情や行動を親自身が確認できているかに焦点を当てて支援を行なう必要がある。